

# 吉田健一「過去」注解

高橋 智子

短篇小说「過去」は、昭和十五年に同人誌「批評」に二回に分けて発表された吉田の最初の小説である。しかし発表当時は、無視されたという表現が一番当たっているだろう。吉田自身も同時期に書かれた評論のいくつかについては、残しておきたいからと後に単行本に収めるなどしているにもかかわらず、この小説については最後まで全く触れることなく、吉田没後の集英社版『吉田健一著作集 補巻Ⅰ』まで単行本所収は無い。

実際、短篇小说であるにもかかわらず、作品は緊密な構成力を欠いて様々な要素に分裂しており、若書きの印象は否めない。詰屈な文章、冗長な展開は、読む者を退屈させる。吉田の没後に、師の河上徹太郎が「ある友達が、「これ何を書いているつもりだい」、って呆れてることがあった」と回想している<sup>1)</sup>が、わずか二日間のケンブリッジでの学生生活を描きながら、ひどくぼんやりとして掴みどころが無く、作者の意図は勿論、作品自体にまとまりを感じさせる決め手を完全に欠いているのである。こうした曖昧さも手伝ってか、現在に至るまで「過去」を中心に扱った研究は発表されていない。しかしながら、この小説には吉田の生涯を貫く主題が隠されており、非常に重要な作品であると以前から私は考えてきた。部分的には拙論「吉田健一の〈近代〉一概念の生成と展開について」<sup>2)</sup>で触れたが、詳しくは「過去」論として改めて述べたい。ここでは、主に平成十四年度に行なったケンブリッジでの実地調査によって判明した興味深い事実を中心に、作品に注をつけてゆく作業を行いたい。ただし、小説内には短篇とは思えないほど膨大な文学作品、作家の名前が挙がっているが、特別に言及すべき問題がない限り、そうしたものには注をつけない。尚、テキストは『吉田健一著作集 補巻Ⅰ』とし、旧漢字は新字体に改めた。級数を大きくして示したのが、テキスト本文である。

325 頁 12 行目

壁の外にはどれにしても同じやうな煉瓦屋が路と路との間を埋めて拵がって居て、

この状況は、2003 年現在全く変わっていない。日本の街にありがちな調和を乱すようなものは殆ど無く、煉瓦でできた二階建て、あるいは三階建てを中心とする似たような住宅が軒を並べている。イギリスの家が日本のそれに比べて耐久性に優れ、百年二百年の単位で存続することは有名だが、古い家と新しい家を区別することが難しいほど、調和を守って建築されている。実際に私が借りたフラット（アパート）は 1986 年に建てられたものだったが、壁を共有している隣

家はビクトリア朝の建築で、しかも外見からは同時に建築された家にしか見えなかった。

#### 326 頁 2 行目

若ものは学舎に行かうかと思つた。河を越せば賑かだつた。

328 頁の 11 行目にあるように、主人公丸橋の下宿はチェスタートン道路 (Chesterton Road) にあるので、川を越す道としては、Chesterton Lane と Castle Street の交わる角から Magdalene Street に入る道が考えられる。Magdalene St. に橋があり、そのあたりから店舗が出現するために人通りが多くなったのであろう。

#### 同 3 行目

橋から三位街の方に行けば、大きな店でまだ締まらないのが一つ二つあるかも知れない

三位街は Trinity Street を指す。

#### 同 4 行目

もうマシウス・カフェは締まつて居て、ブラインドに黒く太文字で名を染めたのが硝子の裏に下され、チョコレートの飾箱も見えない、といふことも考へられた。

マシウス・カフェは実在したカフェ。カフェは The grocery department of Matthew and Son Ltd., の一部で、この大きな食料品店は 1830 年に創立され、134 年後の 1964 年に閉店している<sup>3)</sup>。カフェの建物は 2003 年現在、ローラアシュレイの店舗としてそのまま使われている。

#### 同 5 行目

三位街は直きにフェルス・パレードに変わるのだし、

フェルス・パレードは King's Parade を指す。

#### 同 7 行目

若ものは人込に揉まれたかつたのだけれど、グランチェスターの田舎町にはさう言う所が見付からなかつた。

グランチェスターはケンブリッジを指している。実在のグランチェスターは 3km ほど離れたケンブリッジ郊外のごく小さな可愛らしい村であり、そこには吉田の恩師 G. L. ディッキンソンが常連だった Orchard Tea Garden もある。Orchard Tea Garden は、文字通り果樹園の中にある喫茶店である。こじんまりとしたカフェテラスと、急な雨の際の緊急避難的な場所としてか普段は殆ど客がいない屋内席からなるごく小さな建物の外に、かなり広い果樹園が広がり、そこに創業当時と変わらないデッキチェアと低いテーブルが置かれて、客は建物の中のカフェテラスで飲み物や軽い食事を注文して、戸外で飲食を楽しむ仕組みである。すぐ裏には、ケム川が流れる詩的な田園風景が広がり、ケンブリッジ大学の学生は、一晩の卒業パーティの大騒ぎの翌朝には、ここまでケム川沿いにパントで下り、朝のコーヒーを飲むのがならわしだという。ヴァージ

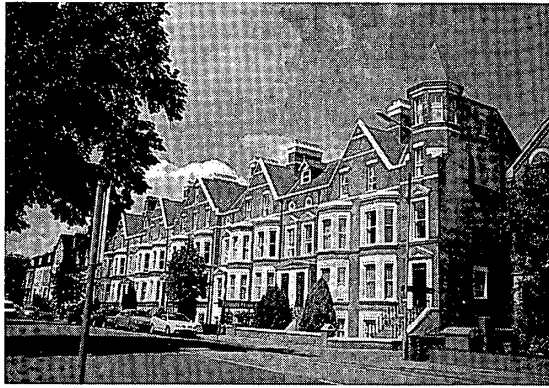


写真1 55 Chesterton Road

(現アランデルハウスホテル)



写真2 2 Alpha Road

ニア・ウルフ、バートランド・ラッセル、ウィトゲンシュタイン、ルパート・ブルックといった錚々たるかつての常連の写真が飾られ、勿論その中にはディッキンソンの肖像もある。ケンブリッジ市内からは、牧歌的な美しい草原を横切る小道も整備され、吉田もこの郊外の村を愛したであろうことは想像に難くない。

#### 同 14 行目

「フローレンスのおかみさん、」と若ものが部屋の中から呼ぶと、婆さんが入って来た。

*CAMBRIDGE STREET AND GENERAL DIRECTORY 1929-30*<sup>4)</sup> の巻末に当時の住民台帳がある。その記録によると、Chesterton Road に当時 P. Sargant Florence という人物が実際に住んでおり、彼は博士号と修士号を持っていることから、大学関係者であった可能性が非常に強い。住所は 55 Chesterton Road で、現在は Arundel House Hotel<sup>5)</sup> になっている (写真1 参照)。ただし、時期は不明だが、後に吉田は 2 Alpha Road に転居している (写真2 参照)。このことは、336 頁に登場するフリイダという人物の實在のモデルに宛てた手紙によって判明した。

#### 327 頁 11 行目

##### 一磅紙幣を三枚

当時の 1 ポンドは円換算で、約 10 円<sup>6)</sup>。3 ポンド、つまり 30 円といえば、昭和四年当時の私大卒の公務員初任給とほぼ同額である<sup>7)</sup>。また、昭和 3 年時における、ポータブル蓄音器が 20 円から 40 円という記録もあり<sup>8)</sup>、いずれにしても小さな金額ではない。そうした金額を、気に入らない絵を居室からはずしてもらうために無造作に置くことを通して、丸橋の非常に豊かな経済状況が示されている。

#### 同 14 行目

##### 黒羅紗のガオン

*Bedders, Bulldogs & Bedells: A Cambridge Glossary*<sup>9)</sup> (ケンブリッジ用語集) によれば、

写真3



PIETRO D'APONE.

学位，あるいは地位によって着るべきガウンは異なるが，大学学部生の場合は膝丈の黒いガウンが一般的であり，20世紀の半ばまで，学部生は文系の授業に出席する時（理系の場合は，実験の際に不便なため着用しなくてもよかった），また試験を受ける時や，教員に呼ばれた時，また夕暮れ以降町に出る時に着用が義務付けられていた．現在でも，Senate House（評議員会館），University Churchである聖メアリ教会，各コレッジのホールを兼ねる食堂，チャペルでは着用を義務付けているとしている<sup>10)</sup>．

吉田の留学時代この規則は厳重に守られていたようで，小説からもそれは読み取れるが，私がケンブリッジの Arts Cinema で見た 1931 年のケンブリッジの学生生活を記録した映画の中でも，学生は授業にガウンを着用し，吉田が「四角の板の帽子」と表現している角帽も被って臨んでいる．ちなみにこの映画の中での授業は，きわめて内容空疎な滑稽な

ものとして描かれていた．

現在では規則の遵守度はコレッジによってばらつきがあり，また食堂での着用も普段ではあまり見ないようである．私の所属したダーウィン・コレッジでは，学期中の水曜日と金曜日の夜に行われるフォーマル・ディナーの際のみ着用が義務づけられ，それ以外の普段の食事の際は着用する必要がなかった．

## 同 15 行目

### ピエトロ・ダポネ魔術博士

Pietro d'Apone. 1250 年にイタリア，パドゥアに近いアポネに生まれる．著名な医者で，占星術師及び錬金術師と伝えられる．「過去」では，「七十二隊の悪魔を自由に操つて居る」とあるが，Charles Mackay の *Memoirs of Extraordinary Popular Delusions and the Madness of Crowds*<sup>11)</sup> によれば，ダポネは7匹の悪魔を操ったという．同書に掲げられたダポネの肖像画には，青年時代の吉田の面影に通うものがあり，丸橋のイメージが吉田自身から借りられていることを裏付ける証左の一つとなるだろう（写真3）．

## 328 頁 6 行目

### フェスティヴァル

吉田の留学当時（1930 年）実在した劇場．Newmarket Road 38 番地に建物はそのまま残っているが，現在は Cambridge Buddhist Centre として使われている．1936 年に the Arts Theatre という別の劇場が町の中心部にできたことが引き金となって，フェスティバルが劇場としての役目を終えた後は，長らく倉庫として使われていた<sup>12)</sup> が，1995 年 3 月に再び劇場としてオープンした<sup>13)</sup> ものの，劇場として継続使用されるには至らなかった．現在も内部のステージと観

客席はそのまま残され、ステージ下に仏像が安置されて、瞑想のための部屋として使われている。丸く作られた劇場で、円形の平土間を囲んで、栈敷ならぬ観客席が二層になってその周囲を取り巻いている。332 頁 3 行目の「フェスティバルは名高い割には規模の小さな劇場だった」という記述通り、かなり小さい。2003 年の 8 月 30 日に、数年ぶりに、一晩のみの芝居上演<sup>14)</sup>があり、運良く観劇する機会に恵まれた。非常に質の高い上演であったにもかかわらず、学生が年度末で街にいない時期であったことが災いし、60 名足らずの観衆が平土間を埋めたのみだったが、それでも幕間のロビーはかなり混んだ。平土間を取り巻く二層の観客席まで満席になると、小説に描かれているようにロビーは大変混雑する筈である。

#### 同 14 行目

フェルス・パレードから小石を畳んだ廊下道に抜けて、聖徒エドワードの寺の前に来た時

King's Parade から St. Edward's Passage に抜けて、St. Edward 教会の前に出ている。

#### 同 15 行目

フィディアス

フィディアスは丸橋と同じ文学専攻の学生であり、349 頁に丸橋と一緒にフルウムル・ブルウムのシェイクスピアの講義に出席している様子が記述されている。また 365 頁では、フィディアスはプルーストの「失われた時を求めて」をフランス語で読んでいる。ベイフィールド、フィディアス、丸橋という三人組の中で、ベイフィールドは 328 頁に聖エドワード寺の横に住んでいることが既に述べられており、326 頁に「思切つて学舎まで行つた所で、友達が部屋に居るかどうかが解らなかつた」とある友達とは、フィディアスを指している可能性が強い。

吉田の同級生で友人であった Frederick Laws (1911~1976) は、この条件をすべて備えており、フィディアスのモデルと見て間違いない。エッセイ「ケンブリッジの大学生」<sup>15)</sup>の中で回想されるフレデリック・ロオスである。ロオスは吉田にフランス語の詩を教え、特待生であったために特別にコレッジ内に居室を与えられていたと書かれている。

今回のキングス・コレッジ図書館のアーカイブにおける調査では、ロオスが英文学と近代語を専攻していた奨学生 (Exhibitioner) であったこと<sup>16)</sup>や、King's Lane Rooms と呼ばれるコレッジ内の建物の 2 階の部屋を割り当てられていたこと<sup>17)</sup>が判明した。吉田が「ケンブリッジの大学生」の中に書いているように、この建物は「食堂の裏に当る」場所にある。

#### 同 16 行目

ベイフィールド

Gerald Charles Bayfield. ロオスと異なり、吉田のエッセイその他に名前は見当たらないが、実在の人物であり、吉田と交友があったことが推測される。キングスの同級生で、*A REGISTER OF ADMISSIONS TO KING'S COLLEGE CAMBRIDGE 1919-90*<sup>18)</sup>の中に名前が見える。卒業後の経歴として、Sir Joseph Williamson's Mathematical School にて、長年 Senior Sci-

ence Master and Head of Chemistry Dept. を務めた後引退した記録があり、この経歴から推測するに、大学時代の専攻は自然科学の領域であり、小説中のベイフィールドと同じく化学であった可能性も強い。

### 329 頁 9 行目

ピース・ヒルは市場に続く、広い、短い路で、其処の、市場を向いて左側の或る古い家の二階にカムの食堂はあった。

Peas Hill は St. Edward 教会に面しており、カムの食堂は St. Edward 教会の並びにあったことになる。実際に 1923 年頃には、St. Edward 教会の隣に Mr. Hardy 所有のレストラン（店名不詳）が存在していて、人気があったようである<sup>19)</sup>。恐らくはこのレストランに吉田も通い、カムの食堂のモデルとしたのであろうと推測される。

### 330 頁 1 行目

フェイ

Hugh Charles Fay (1912~1989). キングス・コレッジにおける吉田の同級生である。専攻は古典で、複数の賞を得た極めて優秀な学生であった。SCOTT'S BUILDING と呼ばれるコレッジの建物の 2 階に居室を持っていたが、キングスに入学する際に奨学金を得ており、そのためにロウスと同じく、コレッジ内に居室を与えられていたと考えられる。ただし、フェイが奨学金を得たのは、金銭的な援助を求めたためではなく、純粋に優秀さの証明を求めたためであったことは確実である。父親もキングス・コレッジの出身者であり、一時はクライスト・コレッジ（ケンブリッジ大学）のフェロウとして歴史を教えている<sup>20)</sup>。フェイの祖父にあたる人物はリヴァプールで海運業を営み、そのまた父親、フェイの曾祖父は、列車のチェーンブレイキの発明者であり、ヴィクトリア時代の二十年ほどをその発明により席捲したという<sup>21)</sup>。つまり、フェイは、「過去」に描かれている通りに非常に豊かな生活と特権を享受し得、またそのずば抜けた豊かさや優秀さによって、ある種の鼻持ちならない傲慢さをまとっていた可能性は充分にある。

### 同 12 行目

ジェローム

モデルは吉田の恩師の Goldsworthy Lowes Dickinson (1862~1932)。ケンブリッジ滞在中吉田に最も強い影響を与えた一人である。「ケンブリッジの大学生」や「G・ロウエス・ディッキンソン」（『交遊録』<sup>22)</sup>）に詳しく書かれた人物像からして、ジェロームが中国最頂で中国帽を被っていることや、夕暮れを嫌うことなど、ディッキンソンその人の面影が濃厚である。「G・ロウエス・ディッキンソン」にもあるように、居室は、キングス・コレッジの中心に位置して壮麗なチャペルに釣り合う威容を誇るギブス・ビルディング内の三階にあった<sup>23)</sup>。この居室は様々な知識人が集う一種のサロンであったようである。

## 同 15 行目

## フリック

この人物には単純なモデルは存在しないが、全くモデルが想定できないこともない。ジェロームの友人にして、小説家、しかも小説内現在において、「イイーア」という長編詩を出版しようとしていることを考え合わせると、吉田のスーパーヴィジョン<sup>24)</sup>の担当者であったF・L・ルカスのことが思い起こされる。

ルカスについては、吉田自身が『交遊録』の中で詳しく述べていて、「ディッキンソンの方がかなり年上だったが二人ともコレツジの幹部で親しい仲だった」<sup>25)</sup>ことや、「ルカスには詩人、或は文士と学者の両方の面があつてその学界に対する寄与にも拘らず詩人や文士の仕事により多くの価値を認めてゐたやうだった。実はその頃までまだこつちは学者になるか文士になるかどつちとも決め兼ねる気がするが、あつて文士の方を結局選んだのに就てはルカスの影響が大きかつたことに今になって思ひ当る。ルカスの最初の詩集である *Time and Memory* がその頃の前衛派だった Peter Quennell に認められたことをこの辺で書いておいた方がいいかも知れない」<sup>26)</sup>とあって、フリックは学者としての面をそぎ落としたルカスが反映している可能性が強い。同じ文章に「ディッキンソンと違ってルカスとの付き合いはこつちが日本に帰ることで実質的に終わったのではなくて或る意味では別な付き合いがその時から始まった」<sup>27)</sup>とあって、帰国後も手紙や著作のやり取りがあったことが書かれている。吉田が日本に帰った後の1932年に、ルカスは *ARIADNE*<sup>28)</sup> という一五〇頁に亘る長編詩を出版しており、フリックの長編詩「イイーア」という題名がギリシア語の響きを持つこと、また同じく恋を扱った内容であることも興味深い。もっともルカスの *ARIADNE* は、アリアドネとテーセウスの神話をアレンジし、迷宮のエピソードの後に、テーセウスが他の女と愛し合ったことを知ったアリアドネがテーセウスを捨てるといふ、神話とは逆の、あるいはねじれた結末となっていて、フリックの「イイーア」のテーマが「地上の恋の賛美」であることとは対照的である。

一方、353頁に描かれるようなフリック像には別の人物の投影があるだろう。「フリックは寝部屋の窓に寄つかかつて、往來を眺めて居た。「イイーア」が済んで、フリックはそれから何をしたらいいのか解らなかつた。本が一冊づつ書き上げられて行つて、ただそれだけのやうな気がするのだつた。フリックは若し自分に財産がなくて、筆耕で生きて行くのだつたら、何が何でも書かなければならないのだから、書くことに就て考へたりしないだらうと思つた。併しさうなれば、生活費を出すのに書かなければならないといふ、有無を言はせない業苦から、どうあつても離れるやうにもがくだらうといふことも想像された。そしてその場合本が非常によく売れて書かないでもいいやうになれば、フリックの現在の場合に話は戻り、本が一冊づつ書かれて行つて、ただそれだけになるのだつた」とあって、フリックは憂鬱に襲われているのだが、この恵まれた経済的境遇と虚無感には、「過去」執筆当時の吉田の反映があるように思われる。「過去」内における丸橋との共通性にも注意しておく必要があるだろう。326頁に「若ものの頭には幾分神経衰弱の前兆が射して居て、外に出ると決めることは、煙草に火を付けるのと同じ程億劫だつた」とあること、また同じ頁で「若ものは人込に揉まれたかつたのだつたけれど、グランチェスターの田舎町にはさう言う処が見付からなかつた」とあって、354頁でフリックが憂鬱を噛みながら、

「人が往つたり来たりして居て、それに多勢で、フリックもその中の唯の一人になれ」る大都市ロンドン行きを考える件を並べれば、それが極めてよく似た精神状況であることがわかるだろう。

### 331 頁 7 行目

フローレンスの野郎（グランチェスターの小使）

未詳。なぜ下宿先と同じ姓を使ったのかはわからない。実在の人物、吉田の下宿先のフローレンス氏は極めて高い学歴を有し、恐らくは大学で教鞭をとっていた幹部（フェロウ）ではないかと推測され、この小使とは全く相容れない。

### 332 頁 4 行目

ペタード

338 頁に「グランチェスター大学フェルス学舎学徒及び舎監、哲学博士、学芸士ギレルムス・ペタード」とあるが、2003 年現在モデルに相当する人物は見つかっていない。1930 年当時のケンブリッジ大学キングス・コレッジの舎監は、1902 年生まれの 28 歳という若い George Rylands ジョージ・ライランズであって<sup>29)</sup>、白髪のペタードとは全く相容れない。ペタードの専門は文学であり、ベイフィールドに「化学は面白いでせう。僕だつてやつて見ました。ただ臭いんでね。（中略）やつぱりホオマアの方がいいや。」などと言っていたり、南アフリカでの冒険エピソードの中で、ホメロスの「オデュッセイア」を暗誦していることから、ギリシャ古典が中心であったと考えられる。吉田はケンブリッジ大学中退後、帰国してアテネ・フランセでフランス語を修了後、ギリシャ語のクラスを終えているので、あるいはそのギリシャ語の教員にモデルがいた可能性もあるが、残念ながらアテネ・フランセは戦災により当時の資料を失っており、調査が不可能である。

### 同 11 行目

ハックスレーの「光明界」

原題 *THE WORLD OF LIGHT*<sup>30)</sup>。オルダス・ハックスレーの喜劇三幕。ロンドンで 1931 年に出版されている。ということは、「過去」が吉田の留学中の 1930 年の 11 月のケンブリッジをモデルにしていることと、時差を見ることになる。実際、当時の *THE FESTIVAL THEATRE PROGRAMME*（ケンブリッジ大学図書館貴重書室所蔵）を調べてみたが、当然この作品の上演記録はない。小説中に細かく筋が記述されていることから、吉田は「光明界」のテキストを横に置いて小説を書いたと推測されるが、興味深いのは、吉田が「光明界」のロンドンでの初演を見た可能性があるということである。

1931 年に出された「光明界」の初版には、本文の直前に初演についての情報が記載されており、1931 年の 3 月 30 日に the Royalty Theatre で上演されたとある。従来の年譜類では、吉田の帰国は 1931 年の 1 月か 2 月、あるいは 3 月であるとされているが、今回の調査では、吉田がケンブリッジを離れたのが 3 月下旬であることが判明した。40 日を越える船旅の上、ローマ駐在の父を訪ねて大学中退の報告をしたという情報もあり<sup>31)</sup>、とすれば、吉田が帰国したのはか



なり後の筈である。私は、キングス・コレッジ図書館のアーカイブにおいて、吉田のケンブリッジ出発を3月の下旬とする証左を複数入手した。まず、*BOARD BOOK 1921-1954* である。吉田の Taken off の項に Lady day 1931 という記述があり、吉田のコレッジからの退学の日付と考えてよいだろう。Lady day は、3月25日を表している。また、*KING'S COLLEGE COUNCIL MINUTES 1930 to 1933* では、1931年の3月7日（土）に行われた会議で、チューターから吉田がこの学期の最後に退学する報告がなされたことが記録されている<sup>32)</sup>。学期は Lent Term で、1月の始めから3月の下旬までカバーする学期であり、このことから吉田は3月の下旬まではケンブリッジに滞在していたと考えられる。さらにもう一つの証拠として、吉田が親しかったロビンソン夫人に宛てた手紙<sup>33)</sup>を加えたい。手紙の内容は、吉田がケンブリッジを去る直前に書いたことを示している。残念ながら日付がなく、日曜日とだけしか書かれていないが、この手紙の整理者によって1931年の3月の手紙であることが書き加えられている。吉田は手紙の中で土曜日に発つと書いており、3月下旬の土曜日であるとすれば28日が相当する。そして、帰国するためにはロンドンを経由しないわけにはゆかず、何日か滞在したとすれば、ハックスレーの「光明界」の初演を見ることが出来た筈である。

さらに、劇中劇として長々とこの芝居が引用されたことには、ケンブリッジ在学当時と「過去」執筆当時の吉田の心境の示唆を読むべきである。

小説内でフィディアスが

「何だつて剣橋なんかに燻つて居るんだい？ 一体君、——」

「兎に角生活が保証されて居る。」

「保証された沈滞だ。」

という登場人物たちのやりとりで不快になり、天才でもない限り「保証された沈滞」を選ばずには生きられないのに、そうした自分たちの姿を冷笑的に描いたハックスレーを非難するくだりがある。しかし吉田自身は、その「保証された沈滞」を選ばず、ケンブリッジ大学と英文学者の道に早々と見切りをつけ、日本の文士になるという保証の無い冒険へ乗り出したのである。ここには、自分は果敢な選択をなし得たのだという吉田の自負を読むべきであろう。同時に、「過去」執筆当時は、文士として十分に成功しているとは言えず、この自負には増長ではなく、自身を奮い立たせる克己の色合いが感じられる。

336 頁 5 行目

丸橋さん

ここで初めて若ものの姓が丸橋であることが明かされる。この姓はケンブリッジの漢字表記剣橋のもじりであろう。

同 同

姪のフリイダ

モデルは、Joan Violet Robinson (1903~1983)。「ケンブリッジの大学生」の中に「アイルランド系ではないかと思はれる、会つてゐてなんともしるい感じがする、名前は忘れたが女の経

済学者も、ディッキンソンの所集る常連の一人だつた」<sup>34)</sup>とあり、この経済学者にフリーダの印象に近いものを見ることができるのではないか。そして、調査の結果、その女の経済学者は、Joan Violet Robinson であるとはほぼ断定できた。当時ロビンソンは、27 歳、ガートン・コレッジ出身の新進気鋭の経済学者であり、先のハックスレーの「光明界」の項でも紹介したが、吉田の手紙から近しい間柄にあった女性であることがわかる。ロビンソンは、キングス・コレッジの著名な経済学者ケインズと親しく、後に経済学の分野で自身も世界的な名声を博し、1979 年にキングス・コレッジの Honorary Fellow となった<sup>35)</sup> こともあり、数多くの資料がコレッジ図書館のアーカイブに残されている。吉田のロビンソン宛の手紙もその中から見出された。他の資料として、彼女の写真を見ることができたが、残念ながら白髪になる以前の写真はモノクロであったので、キングス・コレッジのアーカイブを経由して遺族に問い合わせたところ、彼女の髪は mid brown であったという返事を、ロビンソンの次女 Jeffrey Home 氏よりいただいた。フリーダと同じブロードではなかった訳だが、多くの日本人と親交のあるケンブリッジ在住の Ewa Adams 氏によれば、栗色であっても、明るめの髪は日本人には金髪と認識されることが多いとのことである。

### 337 頁 6 行目

あの例の小説の中のビッドレーク

ハックスレーの 1928 年に刊行された小説 *Point Counter Point* に登場する、熟練した処女ハインターにして売れっ子画家である John Bidlake を指す。

### 338 頁 1 行目

Mit den edlen lebendigen Neuen,

ゲーテの箴言風の詩 “Den Besten” からの引用。意味は「気高く生き生きとして新しい人々」<sup>36)</sup>。ペタードの直前の台詞「丸橋やベイフィールドはフリーダの傍でめざましい冒険を想像して居る。そして僕はまだ金髪で若かつた頃アフリカで、——諸君は僕を老人と思ふのかい？僕はまだ年取つては居ないよ。」となめらかに接続するだろう。

### 同 15 行目

グランチェ 2222 スター大学フェルス学舎

グランチェスター大学フェルス学舎は、明らかにケンブリッジ大学キングス・コレッジがモデルである。最後に詳述するが、吉田の留学時代の事実がかなり使われ、実在の人物や劇場の名前までもがそのまま登場するこの小説にあって、敢えて架空の大学名、コレッジ名が使われた理由としては、まずこの小説が私小説とは異なることのアピールであると共に、当時の吉田の母校に対する強い誇りと裏返しの含羞があったと考えられる。「過去」の発表は、留学の 10 年後だが、それからさらに 10 年を経た昭和 25 年発表の「ケンブリッジの大学生」では、次のような興味深い一節が見られる。

色々な経緯があつて、結局私が入ったコレッジは、その知的な雰囲気濃い方に属する、

キングス・コレッジだった。キングスと言へば、ケンブリッジでも一流中の一流に属するコレッジで、大概さういふ所で学んだものは、自分が行ったコレッジの名を言はないことにしてゐるやうであるが、今では、それが如何に誇りとしていいことであるかと言つた、ぎごちない感情は薄れて、ただ、立派な学校だったといふ記憶しか残つてゐない<sup>37)</sup>。

「過去」の2年前の発表になる随筆「劍橋の学生生活」でも、キングス・コレッジの名前は登場せず、意図的に伏せられていると考えられ、当時の「ぎごちない感情」によって「コレッジの名を言はないことにしてゐる」吉田の姿勢が伺えるだろう。

一方、フェルスの名前も、「知的な雰囲気が濃い」キングスを韜晦するための命名と考えてよいだろう。フェルスは *ferus* と読んだ場合、ラテン語では *undomesticated, wild, uncivilized, rough* の意味を持つ単語となり、吉田が随筆で語る当時のキングスの雰囲気とは懸け離れる<sup>38)</sup>。

### 339 頁 16 行目～341 頁 11 行目

Andra moi énnepe, Mousa, polutropon, hos mala polla (後略)

集英社版『吉田健一著作集 補巻 I』「注記」(396 頁)に指摘があるように、ホメロス『オデュッセイア』の原語による引用。

### 342 頁 2 行目

ブリッジスのヂスメント

桂冠詩人 Robert Bridges (1844～1930) には、ヂスメントなる作品はない。しかし、長編詩で、「テーマも芸術至上派が喜ぶ種類のもの」としては、1929 年の 10 月に出版された *The Testament of Beauty* がある。この「テストメント」が「ヂスメント」と誤植された可能性が強い。「ヂ」と「テ」は形が紛らわしい上に、直前にブリッジスの「ヂス」が来ており、さらに「タ」が脱落して誤植が発生したとしても不思議はない箇所である。内容、出版時期からして、この作品名の誤植と考えるのが妥当であろう。

### 344 頁 12 行目・15 行目

二人は四角に来て、チェスタートンに行く道と町の方に行く道とが其処で別れてゐた。チェスタートン道路に出る道は広い芝原を通つてゐた。

フェスティヴァルのあつた Newmarket Road から Maid's Causeway を歩いて来て、Victoria Avenue が始まる四つ角で二人は別れ、吉田は Victoria Avenue を北上し、ジェロームはキングス・コレッジに向かうために、Short Street を経由して Emmanuel Road を南下した筈である。

広い芝原は、Chesterton Road に向かって右手が Midsummer Common、左手が Jesus Green である。

345 頁 2 行目

丸橋は道を伝つてグラント河が流れて居る所まで来た。其処では堰で一旦制せられた水が音を立てて落ちてゐた。堰に渡された鉄橋から見降ろすと・・・

「グラント河」は明らかにケム川である。ただし、現在 River Cam と呼ばれている川は、古くはグラントと呼ばれており、そのグラントの町ということでグランティブリッジと呼ばれていたのが訛ってカンタブリッジとなり、最終的にケンブリッジとなって現在に至っている。そこから川の名前もケム川となっているので、誤解されていることが多いが、ケンブリッジの名はケム川から由来したものではなく、その逆である。

丸橋は、Victoria Avenue の終点で左折して Chesterton Road に入り、フローレンスの下宿の手前にある堰の前で立ち止まり、そこに渡された鉄橋から川を眺めている。現在もこの地点には細い鉄橋がかかっていて、人々が往来している。

同 5 行目

学生が十二時過ぎに下宿に帰ると、翌朝舎監に下宿の主人がそのことを届けることになつて居る

1930 年の *The Student's Handbook to the University and Colleges of Cambridge* (ケンブリッジ大学図書館貴重書室所蔵) には、CHAPTER III として “RESIDENCE AND DISCIPLINE” が設けられ、各コレッジ及び下宿の門は 10 時に閉められ、特別な許可なしには出てゆくことはできないし、10 時を過ぎて帰った者については、チューターと学部長に対してその名が記録され、12 時を過ぎた場合は重大な規律違反と見なされるとある<sup>39)</sup>。「過去」では、10 時過ぎとあるべきところが 12 時過ぎとなっており、これは帰国後 10 年を経て吉田の記憶が混乱したか、或は *Student's Handbook* 内ではこのように書かれていても、実際には規則が緩んでいて 12 時以降の規律違反のみが咎められたということも考えられる。

347 頁 13 行目

ハイボラル・マルバル伯爵

未詳。

同 15 行目

サア・バラリントン・ポチャン

未詳。

同 同

グジュランワーラの太守

Gujranwala はパキスタンの実在の地名。中華人民共和国との国境に存在する。太守に関しては未詳。

349 頁 1 行目

フルウムル・ブルウムルが文芸学校の講堂で、「シムベリン」の講義をして居た。

フルウムル・ブルウムルのモデルは、H. S. Bennett. 1930 年の Michaelmas Term (10 月から 12 月までの学期) に、Arts School (文芸学校) でシェークスピアの授業を担当したことが、*CAMBRIDGE UNIVERSITY REPORTER* (1930・6・4)<sup>40)</sup> に記載されている。夫人の Mrs Bennett も英文科の講師で、同学期に同じく文芸学校で、17 世紀の詩の講義をしている。小説内では二人の授業日は木曜日で連続しているが、実際にはこの二人の授業日は異なっていて、Mr Bennett が土曜日の 9 時からであったのに対して、Mrs Bennett の方は火曜日の 11 時からである。

350 頁 2 行目

イングラム氏

未詳。(W. G. Ingram か?)

351 頁 3 行目

ジャイルス学舎で、フルウムル夫人が中世期の英語に就て講義をするのだった。

ジャイルス学舎については、次々項を参照のこと。フルウムル夫人は、前々項に述べた Mrs Bennett をモデルと見てよい。ただし、授業内容と場所、曜日、時間帯については事実と異なることは既に指摘した。

同 10 行目

フェルスの礼拝堂

キングス・コレッジの礼拝堂。1446 年に始まった建設は、70 年を経たのちに完成。礼拝堂は、ケンブリッジで最も壮大な建築と言われ、大小の典雅な尖塔を戴いた美しいゴシック様式は、現在でも多くの観光客を惹きつけている。ケンブリッジのシンボリックな建築である。

352 頁 4 行目

二年馴染みの本屋の窓が軒から軒へと続いている先に、ジャイルスの赤煉瓦の建物が街角を塞いで居るのが見えた。

351 頁の最終段落から、フィディアスは、三位街のマシウス・カツフェの前で吉田と別れ、フェルス・パレード=King's Prade とは反対方向の北へ向かって歩いていることがわかる。この方向で Trinity Street 近辺から見える赤煉瓦の建物であるならば、セントジョンズ・コレッジと断定して間違いない。また、Trinity Street の終点近くから見ると、道の曲がり具合のために、セントジョンズ・コレッジの建物に突き当たるように見える。

また、ジャイルスの名は、恐らくセントジョンズ・コレッジに近い St. Giles 教会から取ったものと思われる。チェスタートンから町に入る道としては、Chesterton Lane の終点の四つ角を左折して Magdalene Street に入る方法があり、その四つ角に建つ教会が聖ジャイルス教会で

ある。チェスタートンに住んでいた吉田にとっては、大学への行き帰りに見る馴染み深い教会であっただろう。

尚、「二年馴染みの本屋」とあるのは、フィディアスや丸橋が大学で二年を過ごしたという設定を示していて、半年間の在籍だった吉田自身の事実には反する創作である。

### 353 頁 9 行目～11 行目

フェルス・パレードを南へ行つて博物館を通り過ぎると、左側に病院がある。(中略) 其の先にアパートが十件程あつて、二軒目にフリックが住んで居た。

博物館は、Trumpington Street にある The Fitzwilliam Museum である。フィッツウィリアム子爵 7 世の大学への遺贈をもとにした絵画や美術品のコレクションを誇る。1848 年創設。吉田もこの博物館については、『交遊録』のディッキンソンの章で述べていて、「ディッキンソンがこつちが美術にも興味があることが解つてその博物館に連れて行つてくれ」、何度か通ったとある<sup>41)</sup>。

その博物館から南に向かってすぐの左側が、当時は Addenbrooke's Hospital であった。アデンプルックス病院の創立は 1766 年と早いですが、1972 年の 1 月に Hills Road への移転が始まり、1984 年の 10 月に最後の患者が移って移転が完了<sup>42)</sup> し、現在は The Judge Institute of Management Studies がある。現在も尚、その建物の正面には ADDENBROOKE'S の文字が刻まれている。

元病院のあった場所からしばらくトランピントン通り沿いに、現在でもアパートが軒を連ねている。

### 354 頁 3 行目

もと沼地であつた町

紀元一世紀から五世紀にかけて、ケンブリッジはローマ人の要塞の一つであり、その時代はケム川北側の高台に小さな町が発達していた。その後ローマが去ると、サクソン人がケム川南岸の湿地帯に小高く盛り上がったマーケット・ヒルを開拓したという。つまり、現在コレッジが群れをなしている中心地は湿地帯であつた<sup>43)</sup>。

### 同 12 行目

ストランド・パレス・ホテル

ロンドン、ストランドにある 1909 年創立の現存のホテル。吉田の宿泊の可能性を確かめるために支配人に手紙で問い合わせたところ、丁寧な返信があり、残念ながら当時の宿泊記録は残っていないとのことだった。この返信に参考として、1930 年の 4 月 26 日に供されたレストランの正餐メニューのコピーが添えられており、フランス語で表記されたキャビアのカナッペで始まる堂々たる七皿のコースからは、当時のストランド・パレス・ホテルの格式が感じられる。

同 17 行目

友達のデル

同じ晩にプルーストについて講演をする人物だが、モデルその他は未詳。

355 頁 13 行目

フェルス・パレードの本屋では「イイーア」の予約募集の広告が出て居た。

フェルス・パレードのモデルであるキングス・パレードには、当時本屋は The Cambridge Magazine Bookshop 一軒のみが存在したようである<sup>44)</sup>。

356 頁 15 行目～17 行目

グランチェスターのアパートに住むのを止めて、倫敦に引越すのだった。テムズ河に寄った、ストランドか何処かの家を借りれば、都会の刺激が一層仕事に活気を与えるやうに思はれた。

ストランド (Strand) は岸辺を意味し、トラファルガー広場の東、City へ延びるストランド通りには、先に述べたストランド・パレス・ホテルや、サヴォイ・ホテルなどがある。テムズ河畔までは 200 メートル程。北側には、コヴェント・ガーデンやロイヤルオペラハウスが位置する。確かに都会の刺激に満ちた場所であると言える。さらに、ここで注目してよいのは、ストランドがテムズ河にごく近い通りだということである。358 頁でも、ジェロームがバリ行きの希望を話す際に、部屋を借りる場所として挙げるのは、ケイ・ドルセイ、クウル・アルベエル・プルミエと言ったセーナ河沿いの通りである。この言及に関しては、ジェロームのモデルであるディッキンソンの好みである可能性も否定できないが、後年の小説「流れ」<sup>45)</sup> (『残光』所収) や『金沢』の浅野川、犀川という金沢を形成する二本の川への偏愛、また同じロンドンでは、ストランドとは反対側のロンドン西側チェルシー地区にあるテムズ河が見渡せるホテルが登場する「ロンドン」(『旅の時間』所収) などからもわかるように、吉田は明らかに川沿いの土地への強い好みを持っており、この記述はその非常に早い表明であると言える。

357 頁 2 行目

ウォオタルウの橋

ストランドの南側、テムズ河にかかる橋。

同 同

ブルウムスベリの古本屋

ブルウムスベリ (Bloomsbury) は、ストランドの北側、大英博物館やロンドン大学を含む区域を指す。20 世紀の始めに、ヴァネッサ・ベル、ヴァージニア・ウルフ、リットン・ストレイチーなどを中心として、この地区に住んだ知識人たちのサークルがあり、ブルームズベリー・グループと称されるが、吉田の恩師ディッキンソンやその友人 E. M. フォースターもかかわりがあったとされる。古本屋については未詳。

同 3行目

フラスカティ・グリル

未詳.

同 6行目

「ティペラリーへは長い道」

Tipperary はアイルランドの地名で、そのティペラリー出身の祖父母を持つ Jack Judge (1878~1938) が 1912 年に作曲し、第一次世界大戦中、英国軍とドイツ軍の双方で大流行した歌。原題は "IT'S A LONG WAY TO TIPPERARY". アイルランド出身の若者と故郷に残してきた恋人との陽気な恋の歌<sup>46)</sup> であり、フリックは「一層元気づいた」のである。

同 8行目

広場では、木曜なので露天市場が開かれて居た。

木曜日の市場開催は事実には反する。年間を通して市場の開催は土曜日であったことが、1935 年刊行の *AN INTRODUCTION TO CAMBRIDGE*<sup>47)</sup> に記されている。現在では、市場は毎日開かれているが、日曜日は週日とは異なって、趣味の店といったものの出店になっている。

同 同

広場に立つて居る十字架を中心に、仮に作られた店の棚が四角い広場を一杯に埋めて並んで居た。

広場の中心に立つ十字架は実在しない。Sara Payne の *Down Your Street Cambridge Past and Present Volume I Central Cambridge*<sup>48)</sup> によれば、1855 年に上部に四つの精巧な小尖塔を持つ噴水が広場の中心に建てられ、1953 年に危険になって民俗博物館に移されるまで使われていたという（ただし、実際には現在民俗博物館に移築されているのは、四本の小尖塔のみで、本体の行方は不明である）。吉田の記憶の中で、この噴水が十字架と混同された可能性が高いだろう。写真集 *Memories of Cambridge*<sup>49)</sup> では、当時の市場広場を撮影した写真を見ることができが、確かに四つの小尖塔に囲まれて、一つの尖塔を持つ噴水があり、この中心の尖塔の上に十字架が乗っていると錯覚することも充分あり得ると思われる。あるいは、広場 (Market Hill) より北に向かって、トリニティ・コレッジの向かいにあるごく小さな All Saint's Park という公園の中心には十字架の尖塔が立っており、この十字架が記憶の中で混同された可能性もある。

358 頁 17 行目

何処か河の傍の、ケイ・ドルセイか、クウル・アルベエル・プルミエに家を借りて。

ケイ・ドルセイ (Quai d'Orsay)、クウル・アルベエル・プルミエ (Cours Albert 1er) は、パリの西側、セーヌ河をまたいで左岸と右岸沿いに向かいあって位置する通りで、典雅なアパル



トマンが静かに立ち並ぶ住宅街である。

359 頁 4 行目

僕の家がある丘から、夕方向うの丘を見ると、スペイン公使館に旗が立つて居る。

吉田は、昭和十四年八月に創刊された同人雑誌「批評」の編集兼発行人をつとめていたが、結婚して新居に移る直前の昭和十六年五月号まで、批評発行所の住所は東京市麴町区永田町一ノ七／吉田健一方となっている。伊藤信吉の回想<sup>50)</sup>によれば、それは父茂の家で、健一は両親の家に同居していたことになる。永田町一丁目十七番地は現在の永田町一丁目十一番地にあたり、三べ坂と呼ばれる坂が近く南側が急斜面になっていて、今尚、六本木方面がよく見渡せる。当時のスペイン公使館は、現在そのままの位置にスペイン大使館としてあり、住所は港区六本木一丁目三番地の二十九である。その間直線距離で1キロメートルほどであり、作中の「僕の家」は、吉田自身が住んだ永田町の父の邸をモデルとしていると考えて間違いないだろう。

360 頁 9 行目～12 行目

フリイダが読んだのは例の、

言はずとも我は知る、

彼の魔女の弾く曲を。

の一聯で始まる詩だった。

出典未詳。ハウスマンの詩には、このように始まる詩は存在しない。

361 頁 6 行目

錢舜挙の垣野王図

錢選（1235～1307 以前）。字が舜挙。中国、元代の画家。一生仕官せず、在野の文人として詩画に没頭し、売画で生計を立てた。古典的な白描人物画と花鳥に優れ、古拙な青緑山水を特徴とするとされる。

「ケンブリッジの大学生」には、ディッキンソンの部屋には「字が私などには全然読めない支那の書が、二幅掛けつばなしになつてゐた。」<sup>51)</sup>とあり、ジェローム所有の錢舜挙の垣野王図の複製という設定はフィクションであろう。

363 頁 7 行目

フェルスの先の処から三位街が始まる。その右側には寺があって、左側にはグラッカス学舎が立つて居る。

寺は St. Michael's 教会で、グラッカス学舎は Gonville&Caius College（ゴーンヴィル・キーズと発音）を指す。Caius は、ラテン語の Gaius にあたり、グラッカスの名は、古代ローマの革新政治家グラックス（Gracchus のラテン語読み。英語の読みではグラッカスとなる）兄弟の弟の名前が Gaius であることに由来すると推測できる<sup>52)</sup>。

### 363 頁 10 行目～12 行目

さういふ軒の列が右に曲ろうとする頃、左側が開いて、短い割に幅がある露地が三位学舎の門の前まで続いて居る。それは石造りの、四つ隅に櫓を立てた門で、何百年か前に建てられたものらしく、街から学舎に名を付けたのか、その逆なのかはつきりしたことは言へないやうだつた。

三位学舎は Trinity College を指す。ヘンリー 8 世が 1546 年に設立したコレッジで、ケンブリッジ最大の規模を誇り、28 名にのぼるノーベル賞受賞者を輩出。トリニティ・ストリートから露地というよりも、小さな広場を経て、四つ角に櫓を頂いた石造りの門があり、その上部には創立者のヘンリー 8 世の像が置かれている。

### 同 13 行目

その晩デルは其処の大食堂でプルーストに就いて講演する筈になつて居た。

其処の大食堂は、トリニティ・コレッジのダイニング・ホール。364 頁、2 行目に「壁にはニュートンやテニソンの肖像が薄暗い中に見えて」とあるが、現在でもその肖像画はそのまま飾られている。

この講演は、創作半ば事実半ばである。トリニティ、あるいは他のコレッジで当時誰かを呼んでプルーストについての講演が行われた形跡は無い。しかし *CAMBRIDGE UNIVERSITY REPORTER* (10 月 7 日号) によれば、1930 年の 10 月から 11 月にかけて、トリニティ・コレッジのダイニング・ホールで演劇に関する四回連続の講演が行われていた<sup>53)</sup>。「剣橋の学生生活」にも、「大学の招請に応じて、ロンドンの有名な劇作家が数回に亘つて演劇史を講じた時は、随分逆上せさせられた。何百人だか知らないが、そのあつたコレッジの大食堂は満員続きで、椅子のない場所は立つて居る聴講者で埋まつて居た。」とあって、*CAMBRIDGE UNIVERSITY REPORTER* の告知と合致する。この強烈な印象をもとにデルのプルースト講演が創作されたと考えてよい。

### 364 頁 8 行目

黒い羅紗の下に紺の上衣が見えて、胸にフェルスの赤バラだのフェルサスの黒い鶏が繡はれて居るのが丸橋の目に止つた。

フェルスはキングスだが、キングスの紋章は白い薔薇で、赤い薔薇はトリニティの紋章である。これは吉田の記憶違いというよりは、モデルのキングスを韜晦するための操作であろう。

フェルサスは恐らく Jesus College である。黒い鶏が並んだ紋章はジーザス・コレッジのものである。

### 同 12 行目

プラス・フォア、シングル・ブレスト、ダブル・ブレスト

プラス・フォア=plus-fours (スポーツ用のゆるいニッカースで、通常のニッカースよりも 4 インチ長い)

シングル・ブレスト=shingle-breasted (シングルの上着, スーツ)

ダブル・ブレスト=double-breasted (ダブルの上着, スーツ)

### 365 頁 8 行目～16 行目

—さういふ時、凡ての文学的な携はりから離れて、不意に、家の屋根とか小石に映つて居る日光とか、或は道の匂ひとかが、それ等が私に与へる或特殊な歎びと、又それ等が、(中略) 屋根にしても小石にしても、どうしてか私には解らなかつたが、何か、それ等はその外皮に過ぎないもので一杯に満たされて居て、今にも開いて私にそれを渡して呉れさうなのだつた。—

プルーストの『失われた時を求めて』の一節。「スワン家の方へ」の第一部「コンブレー」の最後に近い部分が、正確に抜き出されている<sup>54)</sup>。

ケンブリッジにおける調査を始めて、かなり早い段階で予想外に多くの事実がこの小説に使われていることを知り、その後も次々と事実と小説が符合してゆくのに驚きつつ作業を進めるような状態であった。特に、ベイフィールドとフェイという二人の同窓生の名前や、下宿先の家名がそのまま使われていることは、完全に予想外であった。

しかし、これを私小説の範疇に位置づけるとすれば、それは全くの誤りである。事実を素材、あるいは枠組みとして使いながらも、実際にはフェスティバルでは上演されていないハックスレーの『光明界』を劇中劇として採用したり、やはり実際の講演内容とは異なるプルーストの『失われた時を求めて』を最終場面に置くなど、この小説は、事実とフィクションの融合によって成り立っている。吉田の終始一貫した私小説嫌悪をここで持ち出すまでもなく、当然事実の告白でもなければ、さらに吉田の想像力の欠如による事実依存でもないことは強調しておかなければならない。それは、最終場面にプルーストに関するデルの講演を設定し、結びとしてベイフィールドの感想とそれに答える友人たちの足音が置かれていることに示されたこの作品のテーマを考える時に明確になる。

ベイフィールドは、「併しさう思ひ出してばかり居たらやり切れないぢやないか。墓場を掘り返すやうなものだ」と言うが、吉田の理解では、まさに「掘り出された墓場」が当時の彼らを取り巻く状態であり、蓄積された膨大な過去の遺産によって、新たなものを生み出す生命力を奪われて倦怠し、閉塞した状況が、吉田が見た時代の本質であった。すなわち、ここで大胆にも吉田は、過去を生き生きと甦らせることによって時間の外に出たプルーストに異議を唱えていると言えるだろう。吉田は、自身の記憶やモデルを使う『失われた時を求めて』の方法に倣い、十年前の彼自身の過去を精密に呼び返そうと試みつつ、そこに呼び出された過去は、自らのうちに再創造された究極の永遠を感じさせるようなものではなく、歴史の遺産と重圧にまみれて窒息寸前の状態であることを示すことで、プルーストに挑戦しようとしたと言える。なぜなら吉田は、ヴァレリーの〈近代〉観を契機として、独自の〈近代〉概念を形成しつつあり、そこではこの時代の本質として、そうした蓄積された過去による圧迫・倦怠こそが主要な要素だったからである。吉田には、プルーストが書かなかった時代の本質を自分は書いているのだという自負があったと考

えてよいだろう。

この小説は吉田の〈近代〉概念の認識を欠いては、茫漠とした表層以上のものは見えてこないだろう。初めに述べたように、吉田の〈近代〉概念については、既に拙稿「吉田健一の〈近代〉—概念の生成と展開」で詳しく論じ、その中で小説「過去」に関しても触れたが、さらに稿を改め、「過去」論として考察する予定である。

最後に、この調査に関して、ケンブリッジ大学図書館日本部長小山騰氏、またキングス・コレッジ図書館 Modern Archive 司書 Rosalind Moad 博士、またケンブリッジ市立中央図書館 Cambridge Collection 司書の方々のご助力をいただいたことに対して感謝の言葉を捧げたい。特に小山氏には、キングス・コレッジの卒業生名簿や、学内の定期刊行情報物としての University Reporter の存在、またキングス・コレッジ図書館 Archive とのコンタクトの取り方、日本の図書館では馴染みの無いカタログによる検索の方法など、大変親切に重要な情報を与えていただき、初めての場所で右も左もわからず途方に暮れていた滞在研究員に、最初の研究生活への一歩を踏み出させてくださったことに篤く感謝を申し上げたい。

#### 注

- 1) 丸谷オ一との対談「吉田健一の生き方—アウトサイダーの文学と酒」(『海』昭和52年10月号)
- 2) 「国語と国文学」平成11年1月号
- 3) “MATTHEW & SON” *THE CAMBRIDGE CHRONICLE AND UNIVERSITY JOURNAL* 1922・12・13, “Old-established City Shop to Close-45 Will be Redundant” *Cambridge News* 1964・4・28, *Cambridge News* 1964・5・2 による。
- 4) W. P. SPALDING
- 5) 1970年に一つの家から出発し、次々に隣家を買収する形で1972年にホテルとしての体裁を整えた。
- 6) 「日本経済新聞」昭和5・11・1(夕刊)調べ。
- 7) 『昭和・平成家庭史年表』(下川耿史 家庭総合研究会編 河出書房新社 '97・12)によれば、「大卒官員(公務員)の初任給は官立大卒の最高133円、私立大卒の最低33円、平均50~60円」であった。(22頁)
- 8) 『昭和史年表〔完結版〕』(神田文人編 小学館 '90・4)11頁
- 9) Compiled by Frank Stubbings Cambridge University Press 2001
- 10) 54頁~55頁
- 11) George Routledge London 1892 大阪外大所蔵
- 12) *THE INDEPENDENT* 1995・1・17 “SITE UNSEEN The Festival Theatre, Cambridge”
- 13) *CAMBRIDGE EVENING NEWS* 1955・2・11 “WHAT'S ON Festival curtain raiser”
- 14) この芝居は、Michael Lunts による A MEETING OF MINDS と題された一人芝居で、脚本も彼の作品である。ラフマニノフと彼の精神科医であったダール博士の物語であり、主人公がラフマニノフであることから、舞台にはグランドピアノも置かれ、Lunts は見事なピアノ演奏も芝居に組み込み、観衆を魅了した。
- 15) 「文藝」昭和25・6月号初出。集英社版『吉田健一著作集 補巻I』所収。
- 16) *KING'S COLLEGE ANNUAL REPORT* 1976・11の obituary (死亡記事)による。
- 17) キングス・コレッジ図書館アーカイブ所蔵の Floor Plans of College Accommodation の中で、吉田がキングスに所属した1930年の Michaelmas term (10月から12月までの学期)のものを参照した。
- 18) By A. E. Campbell P. A. Cornthwaite H.B.F. Dixon Cambridge 1998

この名簿には、吉田の名前はない。1945 年以前入学の名簿に関しては、出版時のデータベースに記録がある者のみを載せているため、物故者や未卒業者の名前は漏れている。

- 19) "A MARKETS CENE OF 50 YEARS AGO" *Cambridge Evening News* 1973・3・12
- 20) *KING'S COLLEGE CAMBRIDGE ANNUAL REPORT* 1989・10 35 頁の追悼記事
- 21) *KING'S COLLEGE CAMBRIDGE ANNUAL REPORT* 1962・11 31 頁の追悼記事
- 22) 昭和 47・7 月号から翌 48・6 月号初出。集英社版『吉田健一著作集 第二十二巻』所収
- 23) キングス・コレッジ図書館アーカイブ所蔵の Floor Plans of College Accommodation により、この件に関しては、吉田の記憶が完全に正しいことが証明された。
- 24) 二週間に一度、あるいは一週間に一度、一人かごく少数の学生が、担当するスーパーバイザーと共に提出したレポートに基づく議論など密度の濃いやり取りを通して学問を身につける授業。少人数制授業の究極の形態であり、大変贅沢な教授の方法と言える。
- 25) 集英社版『吉田健一著作集 第二十二巻』39 頁
- 26) 同 47 頁
- 27) 同 52 頁
- 28) Cambridge University Press 1932
- 29) 「ケンブリッジの大学生」の中に「学生監はジョージ・ライランズ教授で」という記述がある。(集英社版『吉田健一著作集 補巻 I』17 頁)
- 30) London Chatto & windus 1931
- 31) 「キングスに半歳足らずいた吉田健一は、どう思っ<sup>マ</sup>てか、いきなりそのコレッジを飛び出した、そして何か訴えるところがあつて、厳父に叱られ、そのまま当時、たぶんローマの大使官にいられたお父さんにつかまって止め置きにされた。いま私はそう書いて置くが、いろいろ事情は違っていたかも知れない。」福原麟太郎「弔 吉田キングズ健一—些事」(「海」昭和 52・10 月号)
- 32) "The Tutor reported that K.Yoshida was withdrawing from the College at the end of this term."
- 33) ロビンソン夫人宛の手紙。

2 Alpha Rd.

Sunday

Dear Mrs Robinson,

You understand I must see Mr. Lucas once more before I go, and He's asked me to tea on Friday and -----so please don't think too badly of me if I don't come on Friday.

I'm leaving on Saturday, so if I refuse him I shall never be able to see him any more-----except at supervision, a mockery of a meeting. I do hope you will not be angry.

I wonder if I may I may see you some other time. I shall call on Monday evening, Thursday evening and Friday evening, in case you are visible on one of time evenings, and if not----well it can be helped. Perhaps it's just as well that you shouldn't be depressed by seeing me come forlornly and miserably to say goodbye.

I'm so glad, so glad I have met you. You can be sure Cambridge wasn't all darkness to me! Your room made me almost ful as if I was back at home. I shall not forget.

Kenichi.

この手紙の最初にあるように、吉田のこの時点の下宿先は、チェスタートンではなくて、アルファ・ロー

ド 2 番地である。CAMBRIDGE STREET AND GENERAL DIRECTORY 1929-1930 にはあったフローレンスの名前が 1930-1931 版には無く、フローレンス家の移動のような出来事があったのかもしれない。

- 34) 集英社版『吉田健一著作集 補巻 I』22 頁
- 35) KING'S COLLEGE ANNUAL REPORT (1984・10) 所収の obituary による。
- 36) この引用に関しては、中央大学文学部助教授縄田雄二氏にご教示をいただいた。縄田氏によれば、この詩は、ゲーテの詩の中でも最も目立たない詩のひとつだという。
- 37) 集英社版『吉田健一著作集 補巻 I』16 頁
- 38) ferus のラテン語の意味については、ケンブリッジ大学キングス・コレッジ所属 Classics 専攻博士課程在学中の池口守氏よりご教示いただいた。
- 39) 51 頁
- 40) Cambridge University Press
- 41) 集英社版『吉田健一著作集 第二十二巻』32 頁
- 42) *The History of Addenbrooke's Hospital, Cambridge* Arthur Rook, Margaret Carlton and W. Graham Cannon Cambridge University Press
- 43) ロビン・E・グラスコック／金安岩男「ケンブリッジイギリス中世の都市景観を読む (1)」『地理』第 33 巻 第 8 号 (1988)  
『ケンブリッジ』Jarrold Publishing 1998・3
- 44) CAMBRIDGE STREET AND GENERAL DIRECTORY 1929-1930
- 45) 作品の舞台は、庄川と日野川が流れる但馬市と書かれているが、モデルは明らかに金沢市である。
- 46) 情報は County Tipperary Historical Society によるサイト (<http://www.iol.ie/~tipplib/Long.htm>) を参照した。

このサイトによれば、歌詞は以下の通りである。

Up to mighty London came an Irishman one day,  
As the streets were paved with gold, sure ev'ry one was gay,  
Singing songs of Piccadilly, Strand and Leicester Square,  
Till Paddy got excited, then he shouted to them there:

It's a long way to Tipperary,  
It's a long way to go,  
It's a long way to Tipperary,  
To the sweetest girl I know!  
Goodbye Piccadilly! Farewell Leicester Square!  
It's a long way to Tipperary,  
But my heart's right there!

Paddy wrote a letter to his Irish Molly O',  
Saying "Should you not receive it, write and let me know!  
If I make mistakes in spelling, Molly dear", said he,  
"Remember it's the pen that's bad, don't lay the blame on me"

リフレイン (It's a long way to Tipperary で始まる連)

Molly wrote a neat reply to Irish Paddy O',

Saying "Mike Maloney wants to marry me, and so,  
Leave the Strand and Piccadilly, or you'll be to blame,  
For love has fairly drove me silly—hoping you're the same!"

リフレーション

- 47) Chamber of Commerce
- 48) The Pevensey Press 1983 95 頁
- 49) True North Books Limited 1999
- 50) 集英社版『吉田健一著作集 第5巻』(1978・10) 月報
- 51) 集英社版『吉田健一著作集 補巻I』23 頁
- 52) 吉田のグラッカス学舎という創作が、グラックス兄弟の名前に由来することについては、前出の池口守氏より貴重なご教示を得た。
- 53) *CAMBRIDGE UNIVERSITY REPORTER* の告知記事は以下の通りである。

THE CLARK LECTURE ON ENGLISH LITERATURE

Mr H.GRANVILLE-BARKER, will lecture on DRAMATIC METHOD in the Hall of Trinity College at 5 P.M. on Thursday, October 23, 30, November 6 and 13.
- 54) 鈴木道彦訳『失われた時を求めて 1』(集英社 1996) では 313 頁に該当箇所がある。